

【文書 06】

コーサラ国波斯匿王と仏教

— その仏教帰信年を中心に —

森 章司

目 次

はじめに

- 【1】 祇園精舎の建設と波斯匿王
- 【2】 波斯匿王の仏教帰信を物語る伝承
- 【3】 サンユッタ・ニカーヤ「コーサラ相応」に見る波斯匿王
- 【4】 波斯匿王の仏教信仰
- 【5】 波斯匿王とマッリカーの結婚

結 語

はじめに

水野弘元氏の『釈尊の生涯』には、経典の「現存するものの7、8割までは祇園精舎で説かれたものであるとせられ、また戒律も全体の8割強はこの土地において制定されたと伝えられている」とされている⁽¹⁾。

私は教え子である数人の若い研究者と一緒に『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』という研究を行っており、釈尊がどこでどのような経典を説かれたかということについては、その研究報告書のなかで金子芳夫氏が「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧」という資料集を刊行中で⁽²⁾、間もなくその最終報告がなされるので正確にはそれを待たなければならないが、とりあえず現在私が持っているデータをもとに計算してみると次のようになる。パ・漢の経歳・律歳⁽³⁾の中で、釈尊のおられる場所が明示されているものは7,289経であり⁽⁴⁾、そのうちコーサラ国を舞台とするものは5,007経で全体の68.7%、舎衛城を舞台とするものは4,903経で67.3%、祇園精舎を舞台とするものは3,122経で42.8%となっている。

水野氏が言われるよりはいくらか割合が少ないが、竹林精舎や霊鷲山などを含む王舎城を舞台にするものは7,289経中の1,023経であって14.0%に過ぎないから、その多さは群を抜いている。もしこれが原始仏教教団の活動実態を表すものとするならば、コーサラ国や舎衛城は紛れもなく、釈尊の最大の活動地であったといえることができる。

上述の研究の目的は、原始仏教聖典に記述されている記事をもとにして、釈尊の生涯や釈尊教団の形成史を調査しようとするものであるが、もし上記のようにコーサラ国や舎衛城が、釈尊の生涯と釈尊教団の形成史に大きな位置を占めるとするならば、その統治者であった波斯匿(Skt; Prasenajit, P; Pasenadi 波匿、勝光などと漢訳される)王の事績を等閑視するわけにはいかない。

一般的には波斯匿王は、G.P.Malalasekera が *Dictionary of Pali Proper Names* において「ブッダの教団のごく早い時期に、パセーナディは彼の信奉者となり、親密な交友関係を有し、ブッダに対するその献身はその死まで続いた」と解説し、その註にチベット伝承では、

王のコンバージョンは成道2年目であったという説を紹介しているように⁽⁵⁾、釈尊教団形成史の早い時期に熱心な仏教の外護者となったというイメージが持たれているようである⁽⁶⁾。しかしながら後に紹介するように、原始仏教聖典の中には波斯匿王が必ずしも篤実な仏教信者ではなかったことを示す記事も少なくない。そこで本稿では波斯匿王がいつごろ仏教に帰信して、その仏教信仰の実態がどうであったかということ进行调查してみたい。

なお波斯匿王の年齢については後に詳しく紹介するように、「世尊もクシャトリアなら私もクシャトリアです。世尊もコーサラ人なら私もコーサラ人です。世尊が80歳なら私も80歳です」という記述が存する。世尊が80歳といえば入滅された歳であるが、これは舍衛城の近くのMedaḷumpāというところが舞台になっているから、もし釈尊がマガダの王舎城からヴェーサーリーに行かれ、そこで雨安居を迎えるときに80歳の誕生日を迎えて⁽⁷⁾、雨安居が終わった後にクシナーラーに行き、そこで入滅されたとすると、これはその年ではありえない。だから80歳という数字は世尊も波斯匿王も概数であると考えなければならないであろう。しかし概数であったとしても、一応同年配であったと考えることができる。そこで以下にはこの前提で議論を進めることにしたい⁽⁸⁾。

- (1) 春秋社 1960.7 p.230
- (2) 「中央学術研究所紀要・モノグラフ篇」の『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』なる報告書で、現時点までに11冊を刊行した。金子氏の報告は、「マガダ国篇」を第2号に、「祇園精舎(経蔵)篇」を第4号に、「祇園精舎(律蔵)篇」を第5号に、「コーサラ国篇」を第8号に掲載し、次の「その他国篇」で完結する。
- (3) 5ニカーヤとヴィナヤ、ならびに『別訳雑阿含』を含めた漢訳5阿含経と『四分律』などの5広律と一部の漢訳単経を含む。
- (4) 律蔵は、仏のおられる場所が明示され、そこに釈尊と共に釈尊以外の人物が登場するひとつの完結したエピソードを1経と数えた。
- (5) London 1960 p.169
- (6) 菅沼晃氏は、「早くからブッダに帰依し、多くの精舎を建てたり、大勢の比丘を招いて食事の供養をしたりして仏教教団を保護した」と記されている。『ブッダとその弟子89の物語』1990.4 p.198 法蔵館
- (7) 拙稿「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」(上記「中央学術研究所紀要・モノグラフ篇」第1号 1997.7)参照。以下「モノグラフ」と記す。
- (8) 波斯匿王は釈尊と同じ日に生まれたという伝承もある。「于時有四大國王。第一王舎城有大蓮華王。第二室羅伐城有摩羅大王。第三鄔舍尼城奢多彌大王。第四驕奢彌城阿難多泥彌大王。此之四王當菩薩降生之日各於內宮俱誕太子」『根本有部律出家事』大正23 p.1020下。「爾時八王亦是日與白淨王同生太子。彼諸國王各懷歡喜。我今生子有諸奇異。而不知是薩婆悉達之瑞相也。皆集婆羅門各爲太子制好名字。王舎城太子名曰頻毘娑羅。舍衛國太子名婆斯匿。憍羅拘吒國太子名拘騰婆。犢子國太子名優陀延。跋羅國太子名鬱陀羅延。盧羅國太子名曰疾光。德叉尸羅國太子名弗迦羅娑羅。拘羅婆國太子名拘羅婆」『過去現在因果經』大正3 p.626中。チベット伝承も同様のものである。赤沼智善「舍衛城および祇園精舎の研究」(『仏教研究』1-1) p.26

【1】祇園精舎の建設と波斯匿王

成道直後の釈尊の活動地は初転法輪のバーラーナシーを除けば、王舎城やガヤーを中心としたマガダ国にあったことは明らかである。それでは成道後の釈尊が初めてコーサラ国、あるいは舎衛城に足を踏み入れられたのは、いつのことであったのであろうか。それはおそらく祇園精舎を受けられるためにはじめて舎衛城で雨期を過ごされた年であると考えられる。波斯匿王の仏教帰信はこれと関わりなしには考えられないから、まず最初に祇園精舎建立の伝承を検討してみることにしたい。

パーリ“Vinaya”「臥座具犍度」に述べられている祇園精舎建設に関する伝承は以下の通りである。

- (1) 舎衛城から王舎城に商用に来ていた給孤独長者（須達長者）は仏がこの世に出られたことを知る。
- (2) 釈尊に会いに行った給孤独長者は優婆塞になり、その翌日に釈尊と比丘たちを食事を招待して、舎衛城において雨安居に入ることを請う。釈尊は舎衛城に雨安居に入るべき場所があるかと問われ、それを整えることを条件に承諾される。
- (3) 給孤独長者は舎衛城に帰る途中途中で僧園を作り精舎を建てることを勧める。
- (4) 給孤独長者は祇陀太子の園林を買い取り、そこに祇園精舎を建設する。
- (5) 釈尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂を経て舎衛城に到着される⁽¹⁾。
- (6) 釈尊は祇園精舎を四方サンガのために受けられる。

このうち(1)について“Vinaya” (vol. II p.154) は、王舎城の長者が「ブッダを初めとするサンガを招待した」と聞いて、あなたは今「ブッダと言ったか」と3度も確認して、「ブッダという言葉を書くことさえ世間では得難い (ghoso pi kho eso gahapati dullabho lokasmiṃ yad idaṃ buddho buddho)。今世尊に会えるであろうか」と言ったとされている。『四分律』(大正22 p.938中)、『五分律』(大正22 p.166下)、『十誦律』(大正23 p.243下)もディテールは異なるが、趣旨は同じい。したがって舎衛城に住む給孤独長者は、この時点までは釈迦族出身の釈尊が仏になったということを噂にさえ聞いていなかったということになる。もちろんこれが歴史的事実を伝えたものかどうかは分からないが、少なくともこの伝承はこのようなシチュエーションで作られているといわなければならない。

(2)については、“Vinaya” (p.158) は、給孤独長者は釈尊を「比丘衆と共に舎衛城において私の雨安居を受けて下さい (adhivāsetu me bhante bhagavā Sāvattḥiyaṃ vassāvāsaṃ saddhiṃ bhikkhusaṃghena)」と招待して、釈尊は「居士よ、如来は空屋において快樂を享受する (suññāgāre kho gahapati tathāgatā abhiraṃanti)」と答え、長者は「知っております (aññātaṃ)」と応じたことになっている。「空屋」はそのまま「僧院」を意味しないであろうが、給孤独長者は精舎・房・勤行堂などの諸施設を建設したとされており、祇陀太子は門屋を建てたとされるから、それなりの施設はイメージされていたのであろう。

『四分律』(p.939上)は長者が夏安居90日の招待をしたのに対し、釈尊は「すでにピンピサーラ王の招待を受けている」と答えられ、そこで「それでは来年の招待を受けて下さい」というのに対しても、「すでにピンピサーラ王の招待を受けている」と断られたので、「それでは後年の招待を受けて下さい」というのに対し、釈尊は「もし清浄でうるさくなく、悪獣がいなくて静かに坐禅することができる園林があれば、そういうところに住みましょう」

と答えられたので、長者はこれを受けたことになっている。『五分律』(p.167上)も、舎衛城での夏安居を招待したのに対して、釈尊は3度とも黙っておられ、4回目のお願いに「うるさくなく、静かな場所があれば安居しましょう」ということになったとしている。そしてそれを作るために、誰か一人の比丘を差し向けて監督してもらえないかということで、舍利弗が行くことになった。『十誦律』(p.244中)は長者の招待に、世尊は「舎衛国に僧坊があるか」と質問され、「未だありません」という答えに、釈尊が「もし僧坊住処があれば比丘たちが往来できるけれども、ないとなれば往来してそこに止まることができない」と言われたので、そこで長者は僧坊を作ることを約束し、舍利弗を遣して監督させることになったとする。『僧祇律』(大正22 p.415中)も、舎衛城に精舎を作って仏および僧を招待したいという申し出を受けて、舍利弗・目連の二人を監督のために派遣したとしている。律蔵以外の文献では、『中阿含経』28「教化病経」(大正1 p.460下)は釈尊は「舎衛国中有房舎未」と問われ、『別訳雜阿含』186(大正2 p.440中)は「彼国為有僧坊以不」と問われたとする。

このように、この時点には舎衛城には仏教の修行者が止住するための園林も宿泊する施設もなかったのである。舎衛城に仏そのもの、仏教そのものの存在が知られていなかったのであるから、当然であった。

そして(3)については、“Vinaya”(p.158)、『四分律』(p.939中)、『五分律』(p.167中)、『十誦律』(p.244中)ともに、給孤独長者は舎衛城に帰る途中途中で僧園を作り精舎を建て、道路・橋梁の建設を勧めたことになっている。これも王舎城から舎衛城方面に至る交通路に、未だ仏教がもたらされていなかったことを物語る。

そしていよいよ長者がジェータ太子から園林を買い取る(4)の部分に至る。“Vinaya”(p.158)によれば、給孤独長者とジェータ太子(Jeta kumāra)との間で

「高貴なる童子よ、僧園を造るために園を私に与えよ(dehi me ayyaputta uyyānaṃ ārāmaṃ kātuṃ)」

「居士よ、千万(金)を敷くとも僧園は与えられない(adeyyo gahapati ārāmo api koṭṭisantharena)」

「高貴なる童子よ、僧園は買われた(gahito ayyaputta ārāmo)」

「居士よ、僧園は買われていない(na gahapati gahito ārāmo)」

という受け答えがあって、一旦値をつけたものは売ったということだという大臣(mahāmatta)の裁定で買われることになった、とされている。長者は「‘ārāma’を作るために‘uyyāna’(園、庭園)を与えよ」とするのであるから、仏教の施設を建立するために、土地を買い求めたいと申し出たのに対して、ジェータ太子はそれを認識したうえで売らないという意思表示をしたものと考えられる。しかしこの尋常ならざる長者の行動を見て、法と律に浄信を生じるのにはそれだけの功德があるのだと思って、わずかに残った空き地を寄進したという。

『四分律』(p.939中)はここのところを「仏が出世され、私は舎衛国における夏安居を引き受けました。そこで百千二百三百四百千金銭で売って下さい」と言ったのに対して、太子は「汝若以金銭側布滿地令無問者我亦不與」と答えたとしている。そしてこれが「王の昔日の旧制」によって値を決めたということになり、そこでついに売らざるを得ないことになった、とされている。ここでは明白に仏教の施設を造りたいというのを拒否しているわけであ

るが、ここでも仏は常人ではないということを思い知って、足りなかった部分を寄進した、という。

『五分律』(p.167上)は童子祇と須達長者の間に同じような問答があって、これを「官に徹(とど)け、官は法によって断じて須達に与えた」としている。しかしここでは土地を譲った後に、なぜこのように金銭を惜しまないのかと質問して、仏と弟子たちが安居を過ごすためであることを知ったというニュアンスになっている。

『十誦律』(p.244中)も祇陀王子と給孤独居士の会話の後に、断事の大臣が裁定を下したとし、その後で王子は仏法僧衆は必ず大にして小ならずと考へて門屋を寄進したとしている。

このように聖典の記述からは、長者がジェータ太子にその所有の園林を譲ってくれと申し入れたときに、それが仏教の施設を建設するためのものと明示していたかどうかは曖昧である。しかし実際問題としては、長者が故意にそれを隠さないかぎり、太子もその交渉の過程の中で、それが釈尊教団のためであるということは当然のことながら知りえたであろう。したがって太子がはじめこの申し入れを拒絶したのは、彼が仏教に対して何の関わりも関心も持っていなかったことを表していると解することができる。あるいは多少の敵意すら持っていたかも知れない。しかし長者が金を敷き詰めるような熱意を釈尊教団に抱いていることが分かって、最後には思いを改めたのである。

ところでここに登場するジェータ太子について、“Vinaya”では‘Jeta kumāra’とし、『五分律』は「童子祇」としているのみである。しかし『四分律』『十誦律』は「祇陀王子」とし、“Vinaya”も一方では‘ayyaputta’とするから、一般に考えられているようにジェータは「太子」「王子」であったと解してよいであろう⁽²⁾。

しかしこのジェータ王子が波斯匿王とどのような係累にあったのかは必ずしも明らかではない。『増一阿含』34-2(大正2 p.692上)は、瑠璃王子がカピラヴァットゥを討って帰ってきたときに、ジェータ王子が深宮中に妓女と戯れているのを怒って斬り殺したとしている。

『出曜経』(大正4 p.746下)も同じであり、『根本有部律雜事』(大正24 p.242下)も同じ趣旨である。これは瑠璃王子と祇陀王子が兄弟であったものと考えているのであろう。『法句譬喻经』(大正4 pp.583中、590下)は瑠璃は波斯匿の第2児であって、父王は兄太子を自分の後継者にしようと考えていたという。この兄の名は明示されていないが、おそらくこれはこの前に登場する太子祇をさしているものと考えられる⁽³⁾。

しかし後にもふれる MN.87 ‘Piyajātika-s.’(vol.II p.106)、『中阿含』216「愛生经」(大正1 p.800下)、『増一阿含』13-3(大正2 p.571中)には、波斯匿王にとって愛しい者として、ヴァジーリー童女(Vajīri kumārī)＝婆夷利童女＝瑠璃王子、ヴァーサバ・カッティヤー(Vāsabhā khattiyā)＝雨日蓋＝薩摩陀刹利種、ヴィドゥーダバ將軍(Viḍūḍabha senāpati)＝鞞留羅大將＝伊羅王子あるいは尸阿茶大臣などがあげられているが、ジェータ太子は含まれていない。こちらの方は漢・巴に共通する資料であるから資料的価値が高いとすると、あるいはジェータ太子は波斯匿王の子ではなかったかもしれない。しかしそうではなかったとしても、コーサラは釈迦族やヴァジジ族のような共和体制の国ではなく専制君主の国であったから⁽⁴⁾、「王子」と呼ばれるかぎりは、コーサラ王室に属するものであったことは間違いないであろう。

このようにジェータ太子がコーサラの王室に属していたものとすれば、この祇園精舎の寄

進伝承を見るかぎり、コーサラの王室そのものは未だに仏教の信者にはなっていなかったと考えてよいであろう。もし波斯匿王が仏教を信じていないにしても、仏教に親近感を持っていたとすれば、ジェータ太子は給孤独長者の申し入れをむげに拒絶することもなかったであろうからである。

また舎衛城はコーサラ国の首都であって、祇園精舎はそのすぐ南隣にあった園林であるから⁽⁵⁾、その位置関係からしても他の家系に属する王子であったとは考えにくい。また祇園精舎のある場所はいわば舎衛城の喉元にあたるのであるから、防衛上の見地からすれば、その土地を譲るについては十分に信頼できる者でなければならなかったであろう。波斯匿王から釈迦族の娘をその後宮にさしだすようにとの要請に、釈迦族はコーサラ王への反感からマハーナーマが下婢に生ませた娘をさしだしたという伝承が物語るように、釈迦国はコーサラの属国であったとしても、必ずしも良好な関係にはなかった。釈尊在世中の仏教は‘samaṇā Sakya-puttiyā’（釈迦族の子弟が奉じる教え）という認識しか持たれていなかったのもあって、仏教は釈迦族とそのままオーヴァーラップしていたのであるからなおさらである⁽⁶⁾。先に給孤独長者も仏が世に出たことを知らなかったと書いたとおり、おそらく仏教のことをジェータ太子は知らなかったのであろうが、もし知っていたとしても、快くジェータ林を長者に譲り渡すような環境にはなかったのである。

しかも仏教ではあまり「仙人」という言葉を使わないにも拘わらず⁽⁷⁾、原始仏教聖典において祇園精舎は、「このジェータ林は仙人のサンガ (isisaṃgha) が留まって喜ばしい」⁽⁸⁾ とうたわれ、「ここにジェータ林あり。仙人のサンガ (isisaṃgha) が住む」⁽⁹⁾ とされている。これから想像すると、もともと祇園精舎はバラモン教の修行者の住むアーシュラマであったのかも知れない。コーサラはマガダに比べればはるかにバラモン教の伝統が強い土地柄であったから、それを新興の仏教の教団に譲り渡すなど言語道断という背景もあったであろう。

このように仏教や釈尊はまだジェータ太子やコーサラ王国に知られていなかったし、もし知られていたとしてもけっして信用されるまでには至っていなかった。したがって祇園精舎が建設されたときには、波斯匿王はまだ仏教の信仰を持っていなかったであろう。すなわち波斯匿王の仏教帰信は、少なくとも祇園精舎の建設よりも後ということになる。

それでは祇園精舎の建設は仏成道の何年くらいになるのであろうか。これについての詳しい検討は上述の研究の研究分担者の一人である岩井昌悟氏に委ねてあるので、その最終結論はその研究成果を待ちたいが、ここでは取りあえず大ざっぱな検討を施しておこう。

直接的な資料としては、釈尊の雨安居地を伝える伝承がある⁽¹⁰⁾。これによれば祇園精舎での最初の安居は仏成道14年であって、もちろんこれが舎衛城での雨安居の最初である。そしてもちろんこれが祇園精舎が寄進されたその年に当たることになる。一般的にはこれではすこし遅すぎるように思われるかも知れないが、われわれはこれは早すぎることはあっても遅すぎるということはないと考えている。

別稿に書いたように⁽¹¹⁾、われわれは釈尊が弟子たちに「三歸具足戒」によって自分の弟子を取ることを許されたのは、仏成道の7年以降のことであったと考えている。それまでは諸国に伝道に出した弟子たちが、釈尊から「善来比丘具足戒」を授かるために帰ってくるのを釈尊は待っていなければならなかった。情報の伝達は口コミに頼るしかない当時であって

は、釈尊は自由に動き回ることができなかつた。もし動き回ってしまうと、遠いところから帰ってくる弟子たちが、行き所を失ってしまうからである。しかし釈尊は「三歸具足戒」によって仏弟子たちが出先で自分の弟子を取ることができるようにしたので、初めて行動の自由を得ることになった。釈尊がウルヴェーラーやガヤーの地から王舎城に移動されたのは、それ以降のことであった。

前記の祇園精舎寄進の伝承を記す「臥座具韃度」は、毎朝毎朝靈鷲山あたりから乞食してくる比丘たちを見て、ある長者が竹林園に精舎を寄進する許可を得て、仏教教団にはじめての建造物が建てられたところから始まる。これはピンビサーラ王によって竹林園が寄進された後のことで、最初はそこに精舎は建設されていなかったのである。この精舎の建設はおそらく舍利弗・目連の歸信の後に和尚と弟子の制度が制定され、十衆白四羯磨による受具足戒制度が制定されたほか、さまざまな基本的生活規則が制定されて、仏教のサンガが安定して以降のことではないであろうか。それまでは、王舎城の女性たちからの、釈尊がやってきて夫や息子を奪い家系を断絶させるといふ非難や、宗教者らしい起居動作をわきまえない仏教の出家者に対する非難が澎湃として起こっていたので、精舎建設などの事業は起こりにくかったものと考えられるからである。

そしてこのサンガの安定は早くとも釈尊成道の12年以後のことであり、祇園精舎の建設はさらにそれよりも後のことになる。『四分律』によれば釈尊が給孤独長者の雨安居を受けられたのは、給孤独長者との会見の2年後のこととされるのであるから、このように考えると祇園精舎における最初の雨安居は、もっとも早くとも成道14年ころということになるからである。

以上のように、祇園精舎の建設は早く見積もっても、仏成道14年であって、その時には波斯匿王は未だ仏教に歸信していなかった。一般的に波斯匿王は釈尊の活動の初期から、熱心な仏教信者であったように考えられているが、それは誤りであるといわなければならない。

祇園精舎建設の因縁譚は、さらにこの後、(5) 釈尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂を経て舎衛城に到着される、(6) 釈尊は祇園精舎を四方サンガのために受けられる、と続くのであるが、今の主題とは関係しないので省略する。

- (1) 『四分律』は毘舍離とするが、重閣講堂とはしない。
- (2) 『中阿含』28「教化病経」(大正1 p.458中)は「童子勝」としているだけであるが、『増一阿含』34-2(大正2 p.692上)は「祇陀太子」としている。増一阿含34-2(大正2 p.692上)によれば、「祇陀太子」は釈迦族を滅ぼすのに手を貸さなかったという理由で、流離王によって殺されたとしている。『十誦律』「(比丘尼)波夜提97」(大正23 p.323上)は祇陀王子とし、波斯匿王の王子と考えているようである。
- (3) Malasekera は次のように解説している。「一般にジェータ・クマラといわれる。北伝伝承によれば、波斯匿の息子で、クシャトリヤ姫・Varsikāの子(Rockhill 48,n.1)。彼のhalf-brotherである毘瑠璃によって殺された」p.963
- (4) バラナス・ヒンドゥー大学のVishuddhanand Pathak教授の著した*History of Kosala upto the Rise of the Mauryas* (Motilal Banarasidass, 1963) は次のように述べている。

コーサラにはラーマの息子であるKusaとLavaに始まる、アヨーディヤーとシュラーヴァスティーの独立した二つの支配者があって、それがDivākaraのときに統一され、シュラーヴァスティーが首都となった。Divākaraについてはいかなる情報も見いだせないが、このコーサラは君主体制をとって、「gana」として知られる近隣の非君主体制の国々に覇権を及ぼすよう

になった。これが頂点に達したのがマハーコーサラとブラセーナジタ 2 世の時である (pp.205～6)。

ブラセーナジタはコーシャラの太陽王朝の最後の偉大な専制君主であった。Māndhātā から Rāma に至る偉大な転輪王の後についてはほとんど記録が残されていないが、コーシャラの国力は彼の偉大なパーソナリティを通して再び大きくなった。ラーマの後を継いだコーシャラの支配者は弱く、ラーマの王国を分割したことはその王朝を弱体化せしめた。アヨーディヤーの支配者であった Divākara は新しい地域の政治的支配者に就任したが、ブラセーナジタの時代までコーシャラ王国の力と威信は部分的に回復されたにすぎなかったし、マガダ帝国台頭のうねりに没するまでのほんのひとときを楽しんだに過ぎない。ブラセーナジタはコーシャラの華々しい時代の夕暮れどきの日の光と沈み行く太陽の最後の輝きを証明した (p.216)。

- (5) 現在サハートが祇園精舎跡、マハートが舎衛城跡と考えられている。この両者は 1 キロくらいしか離れていない。
- (6) 「提婆達多 (*Devadatta*) の研究」 (「モノグラフ」第 11 号 2006.10) 【7】 [4-5] 参照
- (7) 「仙人」という語が使われた地名としては仙人墮処鹿野苑が有名であるが、ここもバラモン教の修行者が集まるアーシュラマであったと考えられる。
- (8) MN. 143 ‘Anāthapiṇḍikovāda-s.’ (vol. II p.100)
- (9) SN. vol. I pp.33, 55, 『雑阿含』593 大正 2 p.158 中
- (10) 岩井昌悟「原始仏教聖典に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」 (「モノグラフ」第 6 号 2002.10) 参照
- (11) 「提婆達多 (*Devadatta*) の研究」 p.29

【2】 波斯匿王の仏教帰信を物語る伝承

以上のように、波斯匿王は早く見積もれば仏成道 14 年となる祇園精舎建設時点では、未だ仏教信者になっていなかった。それでは原始仏教聖典においては、波斯匿王はいつ、どのような経緯によって仏教に帰信することになったとしているのであろうか。これには二つの伝承があるので、次にこれを調査してみたい。

SN.3-1 (vol. I p.68) は ‘Dahara’ (幼年) と名付けられており、『根本有部律』でいうところの「少年経」に相当する。その粗筋は次のとおりである。

世尊が舎衛城・祇樹給孤独園におられたときのこと、コーサラの国王である波斯匿が釈尊のところへやってきて、世尊と次のような問答をした。

「尊者ゴータマは無上の正等覚を覚ったと自称されるのですか (bhavam pi no Gotamo anuttaram sammāsambodhim abhisambuddho ti patijānāti) 」

「大王よ、無上の正等覚を覚ったと正しく語りうる者があったとすれば、その正しく語りうる者は私です。大王よ、私は無上の正等覚を覚りました」

「ゴータマよ、サンガを持ち、集団を持ち、集団の師であり、よく知られ、名声あり、救済者であり、多くの人々に称賛・尊敬されている沙門・婆羅門があります (samaṇa-brāhmaṇā saṅghino gaṇino gaṇācariyā nātā yasassino titthakarā sādhu sammataḥ bahujaṇassa) 。例えば、プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴースーラ、ニガンタ・ナータプッタ、サンジャヤ・ペーラッティプッタ、パクダ・カッチャーヤナ、アジタ・

ケーサカンバラです。彼らでさえも、自分によって無上の正等覚が覺られたかと尋ねられて、無上の正等覚を覺ったとは自称しておりません。どうして生まれて年若く、出家して新しい尊者ゴータマが (*kiṃ pana bhavaṃ Gotamo daharo ceva jātiyā navo ca pabbajāya*) [そう自称できるのですか]

これに対して世尊はクシャトリアや蛇や火や比丘は若いとって輕蔑してはならないと教え、これによって波斯匿王は優婆塞となったとしている。「今日より生涯歸依する優婆塞として私を扱って下さい (*upāsakaṃ maṃ bhante Bhagavā dhāretu ajjatagge pāṇupetaṃ saraṇaṃ gataṃ*)」というのはいわば定型的表現であって、必ずしもはっきりと意識したうえで使われたものではないかも知れないが、しかし後世の伝承ではこれが波斯匿王の歸信であったとされている。

漢訳でこれに相応するのは『雜阿含』の第 1226 經 (大正 2 p.334 下) であるが、ここでは波斯匿王が優婆塞となったとは記されていない。また『別訳雜阿含』は第 53 經 (大正 2 p.391 下) であるが、ここでは波斯匿王は「世尊。我於今者實有過罪、自知毀犯。譬如嬰愚狂癡無知所作不善。唯願世尊。憐愍我故聽我懺悔」といい、世尊は「我今愍汝聽汝懺悔」とされたので、波斯匿王は「既蒙懺悔心大歡喜、作礼而去」とされているけれども、優婆塞になったとは記されていない。

しかしこれは、後にも触れるように、サンユッタ・ニカーヤでは「コーサラ相応」と名づけられるコーサラを舞台として、波斯匿王を主人公とする一連の經の最初に置かれているから、聖典の編集者はこれが波斯匿王の仏教歸信の契機になったと考えていたのであろう。そこで後の『根本有部律』 (大正 23 pp.641 中、664 下、717 上、911 上、948 下)、『根本有部律出家事』 (大正 23 p.1040 上)、『根本有部律破僧事』 (大正 24 p.142 下) や『中本起經』 (大正 4 p.159 中)、『衆許摩訶提經』 (大正 3 p.969 中) などでは、これを波斯匿王の歸信の因縁として扱っている。

波斯匿王の歸信を語るもう一つのエピソードは「愛生經」である。これは仏傳經典などでも波斯匿王の仏教歸信物語として扱われているわけではないが、聖典にはここでも波斯匿王が優婆塞になったとしている。

『中阿含』216「愛生經」 (大正 1 p.800 下) は、世尊が祇園精舎におられたときに、1 人の梵志が子を亡くして悲しみ憂うことから、波斯匿王とマッリカー夫人 (1) の「釈尊は愛から悲しみが生じると説くというが本当か」という問答となり、これを契機として、「拘薩羅王波斯匿語曰。未利。從今日去沙門瞿曇因此事是我師。我是彼弟子。未利。我今自歸於佛法及比丘衆。唯願世尊受我為優婆塞。從今日始終身自歸乃至命盡」というように、波斯匿王が優婆塞となったとされている。

この相当經である *MN.87 'Piyajātika-s.'* (vol. II p.106) でも、「そのときコーサラ王パセーナディは座から立ち上がって、上衣を偏袒にし、世尊に向かって合掌してから、三度ウダーナを唱えた。世尊・応供・等正覺者に歸依し奉る、乃至世尊・応供・等正覺者に歸依し奉る、と」と表現している。

また『増一阿含』13-3 (大正 2 p.571 中) もこれに相応するが、ここでは釈尊の話を伝え聞いた波斯匿王が、夫人に「若當彼沙門瞿曇來者、爾乃可得共言論。自今以後當更看汝勝於常日、所著服飾與吾無異」と語ったとしている。

ところでこれらのエピソードはいつごろの話であったのであろうか。第一のエピソードは「少年経」と呼ばれるように、釈尊は「年少」で、「出家して久しからず」とされている。しかしこの「年少」は、先に紹介したわれわれの研究の研究報告書である「モノグラフ」第1号に述べたごとく⁽²⁾、120歳に達するような老婆羅門や、かなり先輩とイメージされていた六師外道と比較してのことであって、現代的な感覚での「年少」であったとは考えられない。釈尊は29歳で出家し、その後6年間の苦行ののち成道されたのであるから、決して「年少」ではないし⁽³⁾、しかもこの経は祇園精舎に釈尊がおられたときのことであるから、前述したようにさらに少なくともそれから14年は経過しており、「出家して久しからず」ということもない。

梵行期・家住期をへて林棲期に進み、その後に遊行期を迎えるというアーシュラムがいつごろ形成されたか定かではないけれども、聖典編集時には成立していたことは確実である。この言葉にはこういうインドの風習が背景にあったものでもあろう。したがって成道後14年たった50歳ごろなら、こうした呼び方がなされても不思議ではなかったと考えられる。

これに対して第2のエピソードではマッリカー夫人(Mallikā devī)が登場する。この経には先にも紹介したように、波斯匿王が愛する者としてヴィドゥーダバ將軍(Viḍḍabha senāpati)やヴァジーリー童女(Vajirī kumārī)が登場する。ヴァジーリー童女は王とマッリカーとの間に生まれた娘と考えられているから、これは王がマッリカーと結婚して(おそらく後宮に入って)娘をもうけた後のことということになる。この結婚は後に詳しく検討するけれども、おそらく祇園精舎が建設されたころであったと考えられるから、これも波斯匿王の仏教帰信が祇園精舎建立以前に遡ることはないことを示すわけである。

ともかく波斯匿王の仏教帰信については、上記のような二つのエピソードが知られるが、いずれもそう早い時期ではなかったことを示唆する。

(1) 末利夫人。『根本有部律』などでは「勝鬘夫人」と訳されるが、『勝鬘経』に登場する勝鬘夫人とは別人である。

(2) p.106

(3) 釈尊が若くして出家したことを「年若く、漆黒の髪をもち、美しさ若さを有し、第1期にある(daharo va samāno susukāḷakeso bhadrēna yobbanēna samannāgato paṭhamēna vayasā)」と表現する。DN. 4 Soṇadaṇḍa-s. vol. I p.115、DN. 5 Kūṭadanta-s. vol. I p.131。Suttanipāta V.420 p.93は少し変形の表現である。

【3】サンユッタ・ニカーヤ「コーサラ相応」に見る波斯匿王

先に紹介した「少年経」は、サンユッタ・ニカーヤの第3相応である「コーサラ相応」のなかの、コーサラを舞台とし、波斯匿王を主人公とする25経の第一である。これらには漢訳にないものもあるが、『雑阿含』では第1145から1150経と、第1126から1240経の合計21経に、『別訳雑阿含』では第53から73経までの21経に相当する。『雑阿含』は形式が乱れてしまっているので材料にはならないが、『別訳雑阿含』でも先の「少年経」にあたるものは最初に置かれているので、この一連の波斯匿王の事績は仏教に帰信し、釈尊に師事するようになってからの事績を、時系列にそって編集したものと考えられる。そこでこれ

をもとに、波斯匿王の仏教信仰がどのようなものであったのかを探ってみたい。

パーリで言えば、この中の第2から第7までと第17から25経までの合計15経は波斯匿王と世尊との貪瞋癡が不利・苦悩・不安住であること、老死が免れがたいことなど、さまざまな人間の生き方についての問答であって、取り立てて議論すべきような材料は含まれていない。いわばまっとうな波斯匿王が登場するといつてよい⁽¹⁾。

しかしそのほかの経では、必ずしも立派でない波斯匿王が登場している。

第9経は波斯匿王は牡牛・牝牛・山羊・羊を犠牲にする大供犠（mahā-yañña）を用意していたという。DN.23 ‘Pāyāsi-s.’（弊宿経 vol.II p.316）＝『長阿含』7「弊宿経」（大正1 p.42中）にも見られるように、釈尊は供犠には功德はない、供犠をするなら布施をしなさいと教えておられたから、波斯匿王はこの教えを十分に受け取っていなかったことになる。また奴隷や召使い、下男たちは刑罰におびえ、恐怖に震えて準備したという。これも波斯匿王の治世のあり方が仏教の教えにのっとっていないことを表すであろう。そこでこれを報告した比丘たちに、釈尊は供犠の果報の大きくないことを教えている。漢訳相当経は『雜阿含』1234（大正2 p.338上）、『別訳雜阿含』61（大正2 p.394下）である。

第10経は波斯匿王が多くの人々を縄や鎖で縛りつけたことが書かれている。言わば恐怖政治が行われていたのかも知れない。相応の漢訳は『雜阿含』1235（p.338中）、『別訳雜阿含』62（p.395中）である。

第11経は波斯匿王が七人の螺髻梵志（jaṭṭila）、七人のニガンタ（nigaṇṭha）、七人の裸行者（acelaka）、七人の一衣者（akasāṭaka）、七人の遊行者（paribbājaka）が目の前を通りすぎたので彼らに敬礼して、その後で彼らが阿羅漢であるかどうかを釈尊に尋ねた。釈尊は姿形で判断してはならないと教えられている。“Udāna” 6-2（p.064）もこれに相応し、漢訳は『雜阿含』1148（p.305下）、『別訳雜阿含』71（p.399上）である。

第12経は波斯匿王を初めとする五人の王が、五欲に取り巻かれ、欲愛（kāma）の第1は何かということで議論したという話である。これは『雜阿含』1149（p.306上）、『別訳雜阿含』72（p.399中）、『増一阿含』33-1（p.681下）に相当する。

第13経は波斯匿王が大喰らいで、息をぜいぜい言わせていたとされている。そこで世尊は「常に正念を保ち、量を知って食を取る人は、苦しみ少なく、長生きできる」と言われたので、食事をするときにもいつも童子にこの言葉を言わせて、健康を取り戻したという。『雜阿含』1150（p.306下）、『別訳雜阿含』73（p.400上）に相当する。

そして第14経と第15経は波斯匿王と阿闍世との戦争の記事である。第14経では阿闍世王がカーシ国に攻め入り、波斯匿王はこれと戦って、敗れて舎衛国に帰ったことを記している。阿闍世王は悪友（pāpa-mitta）・悪朋（pāpa-sahāya）・悪い仲間（pāpa-sampavaṅka）を持つとされている。第15経はこれも阿闍世王がカーシに攻め入ったのであるが、今度は波斯匿王が勝って阿闍世を捕虜にしたが、たとい害しようとしないうちを害しようとするとはいえ、自分の甥（bhāgineyya）であるからと放免したという。ここでは波斯匿は善玉、阿闍世王は悪玉に描かれているわけである。なお阿闍世王を甥というのは、パーリのアッタカタターによればその母親のコーサラデーヴィー（Kosaladevi）は波斯匿王の妹であって⁽²⁾、カーシはその持参金としてピンピサーラに贈られたものであるが、阿闍世が父王を殺したのでこれを取り返そうとして戦争が起こったという⁽³⁾。

この漢訳対応経の『雑阿含』第 1236 (p.338 中) と 1237 (p.338 下) では、波斯匿王に「阿闍世王は長夜に我において怨恨無きに、人にして怨恨を生じ、好人の所において不好を作す」とし、これは我が善友の子であるから、釈放するとしている。『別訳雑阿含』は第 63 (p.395 下)、64 (p.395 下) で、『雑阿含』と同じような文脈である。原始聖典によるかぎり、この闘いは阿闍世王の仕掛けた戦いであると解釈しているわけであり、特にパーリでは阿闍世王を好意的に見ていない。『雑阿含』は阿闍世を「韋提希子」「善友之子」とし、『別訳雑阿含』も「韋提希子」「親友之子」するのみで甥とはしない。

また最後の第 25 経では、釈尊が「王はどこから来られたか」と問われたのに対し、波斯匿王は「覇権を握り、ほしいものが何でも手に入り、広大な領土を征服する王は忙しいのです」と答えて、老いや死が王の上におしかかりつつあるのに、外に何かなすべきことがあるのですかと叱責されている。相応漢訳は『雑阿含』1147 (p.305 中)、『別訳雑阿含』70 (p.398 下) である。

なお、第 8 経 (vol. I p.75) と第 16 経 (p.86) にはマッリカー夫人が登場する。第 8 経は「自分 (attan) よりもさらに愛しいものがあるかどうか」という、いかにもヤージュニャヴァルキヤとその妻との問答を彷彿させるものである。第 16 経はマッリカー夫人が女兒を生んだことを、波斯匿王が喜ばなかったとされている。しかし興味深いことに、この 2 経に対応する漢訳はない。パーリにあって『雑阿含』『別訳雑阿含』に存在しないものは、他に第 2、第 23 の合計 4 経のみである。第 2 経は内容では『雑阿含』の第 1065 経 (大正 2 p.276 下) に相応するが、これは釈迦族の手長者にちなんだものであって、波斯匿王は登場しない。第 23 経はほとんどこれと同じ文面であるから、これがないのは当然だとすると、このマッリカーが登場する 2 つの経が漢訳にないのは腑に落ちないが、その理由はわからない。

このような波斯匿王を主人公とする一連の経を見ると、波斯匿王が仏教に帰信した以降においても、必ずしも模範的な仏教信者ではなかったというイメージが浮かび上がってくる。

- (1) 以下にその内容を摘記しておく。第 2 経 (vol. I p.70) は貪瞋癡が人の不利・苦悩・不安住であること、第 3 経 (p.71) = 雑阿含 1240 (大正 2 p.339 下) = 別訳雑阿含 67 (大正 2 p.397 上) は老死が免れがたいこと、第 4 経 (p.71) = 雑阿含 1228 (p.335 下) = 別訳雑阿含 55 (p.392 下) は自己 (attā) を愛するなら善をなせ、第 5 経 (p.72) = 雑阿含 1229 (p.336 上) = 別訳雑阿含 56 (p.393 上) は自己 (attā) を護るなら自制せよ、第 6 経 (p.73) = 雑阿含 1230 (p.336 中) = 別訳雑阿含 58 (p.393 中) はこの世において莫大な富を得て酔わず、溺れないものは少ない、第 7 経 (p.74) = 雑阿含 1231 (p.336 下) = 別訳雑阿含 57 (p.393 上) は欲楽のために妄語を語るのは不利苦悩を招く、第 17 経 (p.86) = 雑阿含 1239 (p.339 中) = 別訳雑阿含 66 (p.396 中) は現世と未来の 2 つの利をもたらすために不放逸であれ、第 18 経 (p.87) = 雑阿含 1238 (p.339 上) = 別訳雑阿含 65 (p.396 上) は独座静観している波斯匿王が登場し、第 19 経 (p.89) = 雑阿含 1232 (p.337 上) = 別訳雑阿含 59 (p.393 下) は卑しい人は莫大な富を得て楽しまない、第 20 経 (p.91) = 雑阿含 1233 (p.337 中) = 別訳雑阿含 60 (p.394 上) はその過去の因縁譚、第 21 経 (p.93) = 雑阿含 1146 (p.304 中) = 別訳雑阿含 69 (p.398 上) は闇より闇におもむくもの、光りより光におもむくものについて、第 22 経 (p.96) = 雑阿含 1227 (p.335 中) = 別訳雑阿含 54 (p.392 上) は波斯匿王の祖母の死にちなんですべては死すべきものであるということ、第 23 経 (p.98) は貪瞋癡が世間の不利・苦悩・不安住であることで、第 2 経とほとんど同じ。第 24 経

(p.98) = 雑阿含 1145 (p.304 上) = 別訳雑阿含 68 (p.397 中) は布施について語られたものである。

(2) ふつう阿闍世の母親は *Vedehi* であって、したがって阿闍世も *Vedehiputta* と呼ばれる。この *Vedehi* は *Videha* 国出身とされ、この人とは別人である。

(3) *Jātaka* 239,283

【4】 波斯匿王の仏教信仰

以上のように、サンユッタ・ニカーヤの「コーサラ相応」に見られる波斯匿王は、必ずしも立派な仏教信者ではない。そこでさらに原始仏教聖典全体に範囲を拡げて、波斯匿王の仏教に対する態度がどのようなものであったのかを調査してみよう。大変熱心な信者であったとする資料も存在するが、その反対の資料も多い。まず不信心であった波斯匿王の資料から紹介する。

Vinaya ‘*Pācittiya*’ 53 (vol.IV p.111) は、十七群比丘がアチラヴァティー (*Aciravati*) 河で戯れているのを、波斯匿王が高楼の上で見ている、傍らのマッリカー夫人に、「見よ、あなたの供養を受けている者たちが水の中で戯れている (*ete te Mallike arahanto udake kiḷanti*)」と言ったので、「水中において戯れるものは波逸提」という規則が定められたというものである。

このときの王の言葉を、『四分律』「単提 52」(大正 22 p.672 中) は「看汝所事者」、『五分律』「墮 55」(大正 22 p.59 上) は「看汝福田」、『十誦律』「波夜提 64」(大正 23 p.112 中) は「此是汝所尊重者、於水中作如是種々麤戲」、『根本有部律』「波逸底迦 64」(大正 23 p.849 上) は「当觀汝所重福田」としている。仏教を信じているマッリカー夫人をいかにも皮肉っぽく揶揄しているのであって、これが仏教を深く信じている者の言葉であるとは考えにくい。そこで『僧祇律』「単提 66」(大正 22 p.380 上) は「王未信佛法見是事已、倍生不信、即語末利夫人言。看汝家所事福田」としており、仏教に帰信する前のこととしている。仏教に帰信した後であったとしても、十分な信仰を持っていたとは考えにくい。

MN.88 ‘*Bāhitika-s.*’ (vol. II p.112) と『中阿含』214「鞞訶提経」(大正 1 p.797 下) では、波斯匿王が阿難に世尊は沙門婆羅門に批難される (*opārambha*) ような身口意行をなすことがあるかと問うている。一切の善法を具足しておられるはずの仏に対する不謹慎な問いであり、波斯匿王が敬虔な信者でなかった証拠である。

MN.90 ‘*Kaṇṇakatthala-s.*’ (vol. II p.125)、『中阿含』212「一切智経」(大正 1 p.792 下) は波斯匿王と釈尊が一切智について問答する経であるが、ここには波斯匿の太子である *Viḍḍabha* と阿難が登場し、波斯匿王が阿難を褒めるところで、「世尊よ、この比丘は何という名前ですか (*ko nāmo ayaṃ bhante bhikkhu*)」「瞿曇、此沙門名何等耶」と、阿難の名を尋ねている。阿難は釈尊の晩年 25 年間を侍者として過ごしたとされているから、成道 20 年、釈尊 55 歳の時に侍者になったことになる。この経はそれ以降の様子を伝えたものということになるが、いつも一緒にいるはずの侍者のその名前を知らないということは、少なくともこのころには、釈尊とそれほど親密な関係にはなかったことを物語る。

以上は漢・パの両者に相応経がある、かなり信頼度の高い資料である。以下は漢・パいずれか一つにしかない資料であるから、信頼度としてはそう高くない。*Vinaya*「入雨安居捷度」(vol. I p.153)には次のような話が記されている。ウパナンダ釋子は波斯匿王に前安居を約束した、しかしその住処に行く途中に、衣物多き2つの住処があり、そこで雨安居に入ってしまった。波斯匿王が怒ったので、釈尊は「彼の比丘は前安居を失し、約において悪作に墮す」と罰せられたという。勘ぐりに過ぎるかもしれないが、波斯匿王の招待する雨安居よりも条件の良い住所が二つもあったということであり、そうすると波斯匿王の仏教サンガに対するホスピタリティがあまりよくなかったということになる。

『十誦律』「波夜提82」(大正23 p.124下)は次のようにいう。世尊は舍衛国におられた。波斯匿王は祇樹給孤独園の世尊に毎日会いに行った。そのとき幣衣を着ていた須達居士は世尊を恭敬するあまり、王を立てて迎えなかった。王は怒った。なおここにはマッリカー夫人が登場する。

そして『増一阿含』47-7(大正2 p.782下)には次のようなことまで言われている。あるとき舍衛国の祇樹給孤独園に住していた比丘たちが集まって、次のように相談した。「今波斯匿王は非法を行じ、聖律の教を犯す。比丘尼の阿羅漢道を得しを讖し、十二年中宮内に閉在し、與共に交通し、また佛・法・比丘僧に事えず、篤信之心もて阿羅漢に向う無し。則ち佛・法・聖衆において信心なし。我等宜しく遠離すべし。此の土に止まるなかれ。そのわけは、王が非法を行う時には王大臣も非法を行い、大臣が非法を行うから左右の吏佐も非法を行い、吏佐が非法を行うから諸庶人類もまた非法を行う。我ら今宜しく遠国に乞求して此の邦に止まらず」と。

次は必ずしも原始仏教聖典とはいえない『根本有部律』「波逸底迦82」(大正23 p.872下)であるが、次のようなエピソードが語られている。そのとき勝光王(波斯匿王)は貧善与長者(給孤独長者)・戒勝長者・哥羅王子と一緒に聞法していたが、一人よく分からなかった。そこで悲しんで城に帰り、勝鬘夫人に訴えた。夫人は「仏教を勉強していないからです。仏経を読んでください」といった。しかし自分は年老いているし暇もない。勝鬘や行雨夫人(Vāsabha khattiyā)が経を読む時間かせてくれ、と言った。老年になってなお仏教の教えについての理解が進んでいなかったことを物語っている。

さらに遅い註釈文献であるが、*Jātaka* 468 ‘Janasandha-j.’(vol. IV p.177)には、王は一時主権の誇りに得意になり、愛欲の楽しみにとらわれて、裁判も執り行わず、仏への奉仕も怠っていた。これを世尊に批難されると、「しなければならぬ事がたくさんあった」と言い訳をする話があり、*Dhammapada-Atthakathā*には、ある男の妻を見初めたので男を罪に落として、その妻を奪おうとする話や(vol. II p.1)、日々500人の比丘を供養することを約束したが、8日目には忘れてしまって、比丘たちは追々に減じて、最後に阿難のみ残った(vol. I p.337)、などという話がある。

以上は波斯匿王にとっては芳しからぬエピソードであるが、これに対して波斯匿王の信仰が深かったことを伝える話はそう多くはない。その代表は王園精舎を寄進したことであろう。『五分律』「(比丘尼)僧残7」(大正22 p.80中)によると、舍衛城にあった王園精舎(Rājakārāma)はマッリカーによって寄進されたものとされるが、*Jātaka* 155 ‘Gagga-j.’(vol. II p.15)では王園精舎は祇園精舎の近くにあつて、波斯匿王が建てたとされている。

Dhammapada-Atthakathā (vol. II p.49) は波斯匿が王所有の土地を比丘尼のために寄進したものである。このような事情は『僧祇律』「雜誦跋渠法」(大正 22 p.443 下) によっても知られる。これは次のような話である。そのとき僧地と王地が並んでいて、王地が僧地に入ってきたので、波斯匿王が阿難にいった。「繩を張ってきちんと区別を付けよう」。そこで世尊に相談すると、「王はこれ地主であるから、王と土地を区分することはできません」といわれた。王は「それでは一切を僧に与えよう。王園という名があっても、人は知るであろう」と言ったという話である。

このように舍衛城にあった王園精舎は、その名からも知られる通り、波斯匿王ないしはマッリカーの寄進にかかるものであった。この他に波斯匿王に関わる精舎は知られないから、これが波斯匿王の寄進による唯一の寺院であったものと考えられる。

ところでこの寺は比丘尼寺であった。この寺が比丘尼寺であったことは、『四分律』「單堤 21」(大正 22 p.647 中)、『十誦律』「波夜提 21」(大正 23 p.80 上)、「同 22」(大正 23 p.82 上)、『別訳雜阿含』219 (大正 2 p.455 上)、220 (大正 2 p.455 中)、222 (大正 2 p.455 下)、223 (大正 2 p.456 上) や、『根本有部律』「僧伽伐尸沙 8」(大正 23 p.691 中) など多数から知られる。

われわれは現時点では比丘尼サンガの誕生を、摩訶波闍波提の出家が認められて比丘尼が誕生してから 3 年後の、釈尊 63 歳の頃のことと考えている⁽¹⁾。波斯匿王が寄進した唯一の精舎が比丘尼寺院であったことは、その仏教帰信の時期がそう早くなかったことを物語るのであろう。またそれにはマッリカーの影響が強かったことを意味するかも知れない。

そして MN.89 ‘Dhammacetiya-s.’ (vol. II p.118) には、波斯匿王の釈尊への信仰が深かったことが次のように伝えられている。波斯匿王は Naṅgaraka という町に来ていた。ここに別宮でもあったのであろう。その静かなたたずまいを見て波斯匿王は釈尊のことを思い出して会いたくなった。たまたま釈尊はそこから 3 由旬しか離れていない Medaḷumpa という村におられることがわかったので会いに行った。そこで波斯匿王は仏・法・僧に対する敬虔な思いを吐露し、最後に「世尊もクシャトリヤなら私もクシャトリヤです (bhagavā pi khattiyo, aham pi khattiyo)。世尊もコーサラ人なら私もコーサラ人です (bhagavā pi Kosalako, aham pi Kosalako)。世尊が 80 歳なら私も 80 歳です (bhagavā pi āsītiko, aham pi āsītiko)。世尊に五体投地をなし、親愛の情を表わす資格はあるでしょう (iminā vārahām evāhaṃ , bhante , bhagavati paramanipaccākāraṃ kattum , mittūpahāraṃ upadaṃsetum)」と言って別れたとしている。この部分を漢訳の『中阿含』213「法莊嚴經」(大正 1 p.795 中) は「我亦国王世尊亦法王。我亦刹利世尊亦刹利。我亦拘薩羅世尊亦拘薩羅。我年八十世尊亦八十。世尊以此事故我堪耐為世尊尽形寿下意恭敬。尊重。供養。奉事」としている⁽²⁾。

また『中阿含』154「婆羅婆堂經」(大正 1 p.673 中) は、釈尊が波斯匿王は「沙門瞿曇は種族が高く、沙門瞿曇の財宝は甚多で、沙門瞿曇の形色は至妙で、沙門瞿曇には大威神があり、沙門瞿曇には善智慧があって、自分にはこれらが無い」として自分を愛敬至重してくれているのではなく、「ただ波斯匿拘娑羅王は法を愛敬し、至重供養して奉事をなすがゆえに、我が身を下意して私を愛敬し至重供養して奉事しているのだ」と、波斯匿王の謙虚さと敬愛心の強いことを認めている。

DN.27 ‘Aggañña-s.’ (vol. III p.83) と『長阿含』5「小縁経」(大正1 p.37中)は、釈迦族がコーサラ国の波斯匿王に臣下の礼をとり、王に従順で、席を立ち、合掌をなし、謙遜なる態度をとるごとく、コーサラ国の波斯匿王は如来に対して従順で、合掌をなし、謙遜なる態度をとる、とする。

そのほか、AN.10-30 (vol. V p.65) は、波斯匿が戦争から帰ってすぐに釈尊を訪れ、十の徳をもって褒め称えている。また『十誦律』「衆学85」(大正23 p.139中)は、波斯匿王が法を立てて、毎日祇樹給孤独園の世尊に説法を聞きに行こうと誓った、とされている。『増一阿含』6-3 (大正2 p.560上)は「善本を建立する王は波斯匿である」とする。なお、ここでは無根の善信を得て歓喜心を起こすものは阿闍世とする。

また後の文献であるが、*Jātaka* 424 ‘Aditta-j.’ (vol. III p.469) は、コーサラ王が詳しく調べたうえで福田を了知し仏教僧団に絶大の布施を行ったとし、*Jātaka* 499 ‘Sivi-j.’ (vol. IV p.401) はコーサラ王が較ぶものなき布施を行った。それでも王は満足しなかった、という。

以上が波斯匿王の信仰ぶりを肯定的に伝える資料である。しかしその信仰が余り深くなかったとするエピソードにはリアリティが感じられるが、その深いことを伝える文章は最晩年の「法荘嚴経」を除くと、形式的であるような印象を受ける。波斯匿王はマッリカーの影響によって仏教に入信したけれども、通り一遍の信者であって、最晩年に至るまでは必ずしも仏教に深い信仰を持っていなかったといつてよいのではなかろうか。

一般に仏教に対する熱烈な信仰を持つ王としてピンビサーラと波斯匿の二人があげられるが、しかし実際にはこの両者の信仰ぶりについては大きな隔たりがあったようである。それはピンビサーラが最初の園林である竹林精舎を寄進して、マガダのみならずインド社会に仏教が認知される大きな役割を果たしたのに対し、波斯匿王は舎衛城に仏教がもたらされたときに、さしたる支援をしなかったことに象徴的に現れているが、『根本有部律』「波羅市迦3」(大正23 p.664下)の次の文章は、両者のイメージの違いを端的に物語っているといつてよいであろう。「マガダ王影勝は見諦を得已りて、八万の諸天並にマガダ国婆羅門居士の無量百千衆と俱なりき。王舎城において鼓を撃ちて宣令すらく、我が国中に於て居住せん者は應に賊を作すべからず、若し賊を作さんには當に遠く流擯すべし、失ふ所の直は我庫物を以てして用ひて酬填せん、と。世尊は勝光王の爲に少年経を説いて信を生ぜしめおわると、勝光王は橋薩羅国に於て鼓を撃ちて宣令すらく、我が国中に於て居住せん者は應に賊を作すべからず、若し賊を作さんには當に其の命を断ずべし、失ふ所の直は我庫物を以てして用ひて酬填せん、と」。

(1) 「モノグラフ」第10号 p.59

(2) 『増一阿含』38-10 (大正2 p.724中) もこのときの模様を伝えたものと考えられるが、これらの言葉は含まれていない。

【5】波斯匿王とマッリカーの結婚

以上のように波斯匿王の仏教帰信には、マッリカーが深く関わっているように思われる。もしそうだとすれば、波斯匿王の帰信年を割り出すにはマッリカーとの結婚がいつごろのこ

とであったのかということが問題となる。

波斯匿王とマッリカーの結婚を物語る原始仏教聖典は次の『四分律』「単堤 81」（大正 22 p.689 中）のみである。これには次のように述べられている。

世尊は舎衛城の祇樹給孤独園におられた。そのとき城中に耶若達（*Yaññadatta*）という大富豪のバラモンがあり、黄頭という婢がいて末利園を守っていたが、いつか婢の身分を脱したいと望んでいた。その思いから世尊とは知らずに世尊に食事を供養した。

あるとき波斯匿王は鹿狩に出かけ、疲れて末利園に休んだ。黄頭は王だとは知らなかったが献身的に世話した。王はすっかり気に入り、バラモンから百千両金で買い取って、後宮に入れた。長じて王の大いに愛するところとなった。末利園中で得られたので末利夫人と呼ばれるようになり、500人の女人から選ばれて第一夫人となった。夫人はこの業報はあるとき沙門に食事を布施したことだと思ひ至り、これこれの相貌をした沙門が舎衛城にいるかと尋ね、それが仏と分かったので波斯匿王に仏に会いたい旨を話した。王はこれを許したので、恩に報いるために世尊に会いに祇園精舎に行った。そして優婆夷になった。さらに帰って波斯匿王を信樂せしめた、とされている。

これにははっきりとマッリカーが波斯匿王を仏教に導いたとされているが、マッリカーと波斯匿の結婚の時期を特定するような情報は含まれていない。しかし食事を布施したときにはマッリカーでさえも、それが仏だと知らなかったというから、舎衛城に仏教がまだそれほど定着していなかったころであった時をイメージしているのかも知れない。

マッリカーと波斯匿王の結婚については『根本有部律』雑事（大正 24 p.234 上以下）にも伝えられている。

釈迦国の大名（*Mahānāma*）は一つの聚落を持っていたが、その知営務人が突然亡くなったので、たまたまそばにいた使用人の一人の少年を仮に任じた。ところがこれがなかなかよくやるので、これを後に正式に任じた。少年は成長して大バラモン属より女を娶ってこれを妻とし、一男・一女を設け、女を明月と名づけた。やがてこの女は才色兼備の女性に成長した。しかしこの父が病気となり、薬代に年貢を使い込んでしまったので、借金の形に大名の老母の世話をすることになった。老母は餅食を煮、衆華を取るのを日課にしていたが、明月はこれにたくみであったので「勝鬘」と呼ばれるようになった。

勝鬘は真の福田に供養しなかったから貧賤になったのだと考えて、仏に食事を供養した。その途次にたちまち父の朋友に会い、手相を見てもらおうと、大王の妃になるという。そして園に至ると、勝光王が狩りに来ていて、たまたま馬が暴走して園に入ってきたのと会う。王の望み通りに蓮の葉に冷たくした水や暖かくした水を汲んで王に給仕したので、王は気に入って勝鬘を嫁にとろうとする。初めは彼女が駆使人であることを信じなかったが、大名の言葉によって真実を知る。これを王母が聞いて、「婢を取って夫人とするとは」と嘆き、「必ずコーサラ城を失うことになるだろう」という。

ところで勝光王には二人の夫人があった。一人は行雨と名づけ、二人目は勝鬘といった。二人は互いに尊重しあった。後に勝鬘は懐妊し、同時に大臣のバラモン婦も懐妊した。そして共に男子を生み、勝鬘夫人の子は王母の予言に基づいて「悪生（*Viḍūḍabha*）」という名が付けられた。大臣婦の子供は、この子が生まれるまで母親には大変な苦しみがあったので「苦母」と名づけられた。

後に悪生太子と苦母が狩りに出て釈迦族のカピラヴァットゥ城の園林に至った。釈子はこの機会に悪生を殺そうと相談したが、一人の老人に止められた。しかし悪生の兵隊がやってきて園内を周遊して破壊していったということでますます怒りを募らせた。しかしこれも老人に止められた。帰るときに悪生は一人のスパイを残していったので、これが知られることになった。そこで悪生は自分が位を継いだら釋種を討ちたいと誓い、苦母がこれを唆した。

悪生太子は逆害心を起こして父王を殺そうとしたが、長行という大臣は「やがて老王は久しからずして死ぬのであるから」と止めた。

後に勝光王は長行大臣と共に静かな園林に行ったとき、世尊大師に会いたくなった。幸い3クローシャしか離れていない吉祥聚落釋種住処に世尊がおられるのを知って、会いに行った。釈尊にどうしてこのように慇懃なのかと問われ、王はその理由を10も述べた。第10番目の理由が、「我はこれコーサラ王、仏もまたコーサラに住される。我はクシャトリヤに生まれ、仏もまたクシャトリヤ種である。我は80歳を過ぎたが、世尊も80歳を過ぎられた。私は灌頂を受けた王であり、世尊は無上の法王である」というものである。

そのとき長行大臣は悪生に王位をつがせるために、勝鬘・行雨の二夫人を宮から追いだし、老王のところに行かせた。二人は釈迦妙光園の外で老王と会い、彼らは長行のたくらみを知った。老王は勝鬘に帰って子の王の俸料を受けよと城に帰し、行雨と二人で王舎城に行った。未生怨はこれを知って「勝光王は大国の主であるからこれを王となし、自分は退いて太子となろう」と言った。しかし勝光王はしばらく食べ物を食べていなかったため、園林で死んだ。未生怨は「自分は先に自分の父親を害して位を奪ったといわれている。今また父の知識を殺したと言われる」と言って嘆き、丁重に弔った、とされる。この話では毘瑠璃王は勝鬘夫人の子とされているが、一般的には行雨 (Vāsabha kattiya) の方がその母親とされるから、この伝承には混乱があるようである。

波斯匿王とマッリカーの結婚の話は *Jātaka* 415 ‘Kummāsapiṇḍa-j.’ (vol. III p.405) にもある。マッリカーは舎衛城の華鬘師の頭の令嬢で、非常に美しく立派であった。マッリカーは16歳のある日のこと、花園に行って世尊に会い、食事を供養した。その時世尊は微笑されたので、阿難がそのわけを尋ねると、「この娘は今日、コーサラ国王と結婚するであろう」と予言された。そのときコーサラ王はマガダ王の阿闍世と戦争して負けて退却した。その途次で王はマッリカーの歌う歌声に引かれて花園に行き、マッリカーは王の望みを察して蓮の葉に水を汲んで王に給仕した。王は満足してマッリカーの膝で眠り、城に帰ると結婚して王妃となした。マッリカーは王に寵愛され、仏の保護者となった。

これらの話では、マッリカーが卑賤な身分の出身であることと、園林に来た王を手厚くもてなしたことが結婚の縁となったという共通の情報を含んでいるが、それほど信頼に足るものとは思われない。ジャータカによれば、その時期は波斯匿王と阿闍世王がカーシをめぐる戦争をしていたときであるという。とするならばマガダの王がピンピサーラから阿闍世に替わって以降のことで、破僧事件は釈尊72歳の時のことであるからずいぶん遅いこととなる⁽¹⁾。

おそらくこのジャータカの伝承は、先に紹介した *SN.3* の「コーサラ相応」に由来があるのであろう。ここでは波斯匿王と阿闍世王の戦争の記事の次にマッリカーに女兒が生まれたという記事が続くからであり、そこでマッリカーはこの戦争の間に結婚したのだと短絡的に

考えられたのではないであろうか。しかし実際にはこの戦争記事の前にも、自分よりも愛しいものがあるかという波斯匿王との問答があるから、マッリカーの結婚がこの「コーサラ相応」が時系列にしたがって編集されているという前提に基づいて推測されたものとするなら、同じくこの理由によってこの推測は否定されることになる。しかしこのころにマッリカーが女兒を産んだとすれば、彼女はおそらく35歳を越えてはいなかったであろう。マッリカーが16歳で結婚したとすれば、その結婚は少なくとも19年よりも前ではなかったということになる。提婆達多の破僧は釈尊72歳の時であり、この戦争もその年に行われたとすれば、マッリカーの結婚は釈尊の53歳頃以降ということになり、53歳といえばちょうど祇園精舎が建設されたころに相当する。『四分律』「単堤81」がいうように、マッリカーが初めて釈尊と会ったときには釈尊のことを知らなかったとするのも符合する。

マッリカーと波斯匿王の間には **Vajiri** という娘があったとされ、それが先に紹介した「愛生経」に、波斯匿の愛する者としてヴィドゥーダバやヴァーサバ・カッティヤーと並んで登場する。「愛生経」は波斯匿王の仏教帰信のきっかけとなったエピソードとして紹介した経であるから、この **Vajiri** という娘は *SN.* に言及される娘ではない。*Dhp.A.* (vol. III p.266) によれば、**Vajiri** は波斯匿王と阿闍世との戦争が終わったとき、阿闍世の妻になったとされる。波斯匿王とマッリカーはその19年ほど前に結婚しているのであるから、ちょうど結婚適齢期にあったのかもしれない。

このように考えると波斯匿王とマッリカーが結婚したのは、祇園精舎が建設された直後、おそらく釈尊や波斯匿王が50歳過ぎのことであって、仏教が舎衛城にもたらされた直後のことであり、したがってマッリカーも釈尊や仏教のことをよく知らない時期であった。しかしやがてマッリカーは熱心な仏教信者になり、その影響で波斯匿王も仏教に触れる機会を持つようになったが⁽²⁾、しかし必ずしも心から信従するような信者としてではなかった。

そしておそらくはその後もしばらくは仏教や釈尊との関係は持ちながら、必ずしも深い信仰を持たなかった。それは *SN.* の「コーサラ相応」の最終経において王は釈尊から、「老いや死が王の上に迫りつつある (*adhivattamāne*) のに、外に何かなすべきことがあるのですか」と叱責されているところを見ると、かなりの晩年までそのような状況が続いたとも想像される。

しかし「法莊嚴経」が「我也80歳、世尊も80歳」という時には、それこそ敬虔な仏教信者になっていたようであって、それ以前には王園精舎の寄進もなされていたであろう。これは比丘尼サンガに寄進されたものであり、われわれは比丘尼サンガの成立を釈尊63歳の時と考えているから、波斯匿王が仏教に帰信したのが釈尊50歳の時であったと仮定すると、それから少なくとも13年は経過していることになる。しかし王園精舎の寄進は必ずしもそれと同時になくともよいのであるから、あるいはかなり遅かったかも知れない⁽³⁾。*AN.5-49* (vol. III p.57) によればマッリカーは波斯匿王と釈尊がともに存命中に亡くなったとされるから、あるいは阿闍世との戦争の後に生まれたとされる女兒の出産に関わるかも知れない。マッリカーはかなりの年齢に達しての出産であったろうからである。そしてひょっとするとこのマッリカーの死が波斯匿王の信仰を深めたとも推測できなくはない。

(1) 「モノグラフ」第11号 p.99以下

(2) 波斯匿王が早くから熱心な仏教信者であったとする資料もないではない。*DN.4*

‘Soṇadaṇḍa-s.’ (種徳経 vol. I p.111) や『長阿含』22「種徳経」(大正1 p.94上)は、世尊がアンガ国のチャンパーのガッガラ蓮池に止宿されたとき、ピンピサーラによって禄を与えられていたチャンパーのソーナダダ(種徳)婆羅門が、釈尊を訪ねて優婆塞となったとする。このとき尊者ソーナダダは「老い、年取り、高齢で、晩年に達しているが、沙門ゴータマは年若い青年出家者にすぎない (bhavaṃ hi Soṇadaṇḍo jīṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto, samaṇo Gotamo taruṇo c’eva taruṇaparibbājako ca)。沙門ゴータマは年若く、漆黒の髪をもち、美しさ若さを有し、第1期にあるにかかわらず、家を捨てて非家に出家した (samaṇo khalu bho Gotamo daharo va samāno susukāḷakeso bhadrena yobbanena samannāgato paṭhamena vayasā agārasmā anagāriyaṃ pabbajito)」とされ、あるいは「沙門瞿曇少壯出家、捨諸飾好象馬宝車五欲瓔珞、成就此法。」とされている。

また DN.5 ‘Kūṭadanta-s.’ (vol. I p.127) や『長阿含』23「究羅檀頭経」(大正1 p.96下)は、釈尊がマガダ国を遊行されて、カーヌマタという婆羅門村に止宿されたとき、クータダダ婆羅門が釈尊に帰信する話であるが、ここでも同様に釈尊はまだ若かったとされている。しかしながら両経ともにこのときすでに、「マガダ国セーニヤ・ピンピサーラはその諸王子・諸妃・諸侍従・諸重臣とともに沙門ゴータマに帰依している。コーサラ国波斯匿はその諸王子・諸妃・諸侍従・諸重臣とともに沙門ゴータマに帰依している」とされている。

マガダ国セーニヤ・ピンピサーラが釈尊の生涯の早い時期に熱心な仏教信者になっていたことは疑いないが、もしこれを文字通りに受け取れば、コーサラ国波斯匿も同様であったことになる。しかしこの言葉は、人々がソーナダダ婆羅門やクータダダ婆羅門が釈尊のところに行くべきではなく、釈尊を来させるべきだ、そうでないと彼らの権威が失墜するという言葉に対する、釈尊の偉大さを讃えるたくさんの文章の中の一部であって、形式的な文章であることは免れない。

- (3) 王園精舎での事績を調べてみたが、その建立の時期を特定できるようなものはない。『四分律』「比丘尼捷度」(大正22 p.928上)や『根本有部律』「波逸底迦21」(大正23 p.792上)にはマハーパジャーパティー・ゴータミーが登場するが、われわれはその死は釈尊の死の3ヶ月前であったと考えているので、下限の基準とはならない。しかし先の『根本有部律』や『雑阿含』276(大正2 p.73下)は釈尊が老年になられたので、他の比丘に比丘尼教誡を委ねるというものである。

結 語

以上波斯匿王の仏教帰信の時期と、その後の信仰活動がどのようなものであったかを調査し、若干の考察を加えてきた。

その結果、マガダ国のピンピサーラ王と並んで波斯匿王は、仏教教団のごく早い時期に熱心な仏教信者になって、外護者として仏教教団に多大の貢献をなしたと考えられているが、しかし実際は仏教信者になったのはかなり後のことであり、しかも長い間余り熱心でなかったであろうということが明らかになった。

波斯匿王が釈尊と同年であったとして、歴史的な要点を摘記すれば次のようになる。

舎衛城に祇園精舎が建設されたのは、釈尊成道14年、釈尊49歳のころであり、その時初めて釈尊も舎衛城を訪れた。それ以前にはコーサラ国には仏教は伝わっていなかったから、これが仏教の初伝である。それから3、4年経った波斯匿王が53歳のころに、王はマッ

リカーを後宮に入れることになった。マッリカーもその時点では釈尊を知らなかったが、やがて熱心な仏教信者になり、その影響で波斯匿王も形式的に仏教に帰信することになった。やがて夫婦の間には娘 Vajiri が生まれた。

波斯匿王はそれ以降も必ずしも敬虔な仏教信者ではなかったが、72 歳ころに阿闍世王が父のビンビサーラから王位を奪い取るという事件があり、それを契機として戦さが起こった。この戦さは一進一退であったが結局は和平がもたらされ、その過程で Vajiri は阿闍世の妻として迎えられることになった。またこのころにマッリカーは女兒を産んだが、かなりの高齢になっていたこともあって、これによって命を落としたのかも知れない。その時には波斯匿王も 70 歳を過ぎ、人生の無常を悟って、仏教にも深い信仰を持つようになっていたのであろう。80 歳といえば釈尊の入滅された年であるが、波斯匿王もその歳になって、釈尊に深い敬虔の念を覚えるようになっていた。王園精舎の寄進もこれからさほど遡らないときであったのではないかと考えられる。

このように波斯匿王はさほど熱心な仏教信者ではなく、したがってコーサラ国においてはそれほど仏教が隆盛にはならなかったのではないかと考えられるのであるが、それにしても冒頭に記したように、なぜあれ程コーサラや舎衛城を舞台にする経が多いのかが不思議である。あくまでも推測にしか過ぎないが、それは次のような理由によるのではなからうか。

まず経典はすべて口伝に伝えられたものであるが、それらは第一結集において確認されたものがもとになっていることは歴史的事実として承認してよいであろう。そしてそもそも第一結集は釈尊入滅の年に生存していた仏弟子たちが行ったものであるから、その時点までに死没した直弟子たちは参加していない。現存する原始仏教聖典において、初転法輪において最初の弟子となった五比丘たちの影が薄いのもそのせいであろう。とするならば比較的晩年の釈尊の事績が多く聖典のなかに残されているであろうことが推測される。

ところが釈尊の晩年には、それまでの仏教教団の一大基地であったマガダ国に政変が起こり、釈尊教団にたいへん信仰が厚かったビンビサーラが王位を追われて、むしろ釈尊に反逆した提婆達多に味方した阿闍世王が主権を握ることになった。しかしちょうどその頃から、波斯匿王が仏教に大変理解を示すようになって、一気にその中心地がマガダからコーサラにシフトされることになった。もちろん舎衛城の仏教には、給孤独長者やヴィサーカー・ミガラーマター（鹿子母）などの商人階級の熱烈な支持も預かって力があつたことはいうまでもない。

しかも第一結集で釈尊の言行録が確認されたときにも、その場所を詳らかにしないものがあつて、それは六大城あるいは八大城に仮託されたとされる⁽¹⁾。おそらくその多くはその時点で仏教の勢いのあつた舎衛城とされて、これによつても舎衛城を舞台とする経が大多数を占めるようになったのではないであろうか。

このように考えると、現存の経の中でコーサラ、あるいは舎衛城を舞台とする経が多いほど、コーサラないしは舎衛城が仏教教団に占める位置が大きかつたとは考えにくい。それはこの第一結集が王舎城で行われ、その理由は 500 人も多くの比丘が 3 ヶ月もの雨安居を過ごすのは王舎城しかなかつたとされることに、何よりも象徴的に示されている⁽²⁾。

(1) 『十誦律』大正 23 p.288 中、『根本有部律』大正 24 p.328 下、『僧祇律』大正 22 p.497 上

(2) *Vinaya* vol. II p.284、『四分律』大正 22 p.967 上、『五分律』大正 22 p.190 下、『十誦律』大正 23 p.447 下、『僧祇律』大正 22 p.490 下